

五題(同三七題)と、ご支援のおかげで熊本地震の影響もなく、例年と同程度の規模で開催できました。IRCMSとの合同開催の利点である、異分野からの質疑も活発になされました。

エイズ関係では海外から米国 NIH の Vaccine Research Center の Richard Koup 博士を初め三名(他二名はカナダ Montreal 大学 Andres Finzi 博士および米国 Johns Hopkins 大学 Francesco Simonetti 博士)、国内から国立感染症研究所、国立国際医療センターおよび微生物化学研究所等から五名の、第一線のエイズ研究者を招聘しました。初日には、原田学長に参加頂き開会の言葉をいただき、前国立感染症研究所所長の倉田毅先生にも最終日まで参加頂いただき励ましの言葉をいただきました。エイズ治療に向けて望まれるワクチンおよび広範囲中和抗体の開発、関連する課題である潜伏感染、薬剤耐性および合併症などについて最新の研究結果が報告され、現状と今後の課題について議論を深める得難い機会となりました。本セミナーでは、次世代若手研究者の育成にも取り組んでいます。一般演題三九題の中から、研究内容を重視した査読により、二名の若手研究者に口演の機会を設け、更に六題の優秀ポスターを選出して口頭発表の機会も設けました。ポスター討論に二時間を確保して最優秀ポスターの表彰も行ないました。

第二十一回造血器腫瘍研究会 の開催報告

熊本大学大学院生命科学研究部

臨床病態解析学分野教授 松井 啓隆

平成二十九年二月十七日と、翌十八日の二日間にわたり、熊本大学医学部山崎記念館にて第二十一回造血器腫瘍研究会を開催いたしました。本研究会は、国内で RUNX1 (AML1) 遺伝子の基礎研究を盛んに行っていた先生方によりはじめられた、非常にレベルの高い研究発表会の流れをくむもので、その後、造血器腫瘍の発症メカニズムに関する幅広い研究テーマを議論の対象としつつ、現在に至るまで発展を続けています。今回の研究会では、全国の研究者から寄せられた合計二十七演題について、活発な討論が行われました。

昨今のゲノム解析技術の大躍進によって、造血器腫瘍の発症に関わる遺伝子変異の多くが明らかとなりました。その成果はいち早く臨床にもフィードバックされ、近年、遺伝子変異のパターンによって治療反応性や予後の予測がなされるようになりつつあります。一方で、こうした遺伝子変異や、あるいはこれに付随して生じるエピゲノム変化が、実際にどのような根源的な疑問については、まだその大半が解明されていないといえます。こうしたことから、造血器腫瘍研究者の間

では、患者さん由来の腫瘍細胞のみならず、遺伝子改変マウスや iPS 細胞などを広く実験材料とし、分子生物学的に疾患の発症メカニズムを明らかにしていくことの重要性がこれまで以上に強く認識され、本研究会の演題にもこれが色濃く反映されています。

また、この研究会は、若手研究者に発表の機会を与える、良いトレーニングの場としても活用されています。例年八〇名程度の参加者を数えています。登壇する者の多くは発表経験の少ない若手の研究者で、シニアの方々は、所属組織の垣根を越えて暖かい指導をしてくださっています。企業等のスポンサーを受けることなく、自身の研究費や一部の先生からのご支援を頂きながら運営する様式でありながら、若手発表者に旅費を支持するなどによって若手育成に努めてきたのも、本研究会が長く続けられてきた要因のひとつです。今後も本研究会が発展していくことを願ってやみません。

末筆となりましたが、本研究会の開催にご支援いただきました肥後医育振興会、ならびに熊本国際観光コンベンション協会の皆さまに、この場をお借りして、改めて厚く御礼申し上げます。

